

日本に影響を与えた中国の天文暦学者伝 (6)

梅文鼎

梅文鼎 (1633~1721) は、字を定九、号を勿庵という。清初、“暦算第一家” (江永) あるいは“国朝算学第一” (錢大昕) などと目された民間の暦算学者である。安徽宣城 (今の安徽省宣州市) を本貫 (原籍) とする。

梅氏の遠祖は隋代まで遡ることができ、北宋になって二支に分かれた。一支は宣城の九溪河に住み、北宋の詩人の梅堯臣が最も著名である。別の一支は宣城の柏硯山の山口に住まい、明末に梅守徳など多くの名士を出した。梅文鼎は後支の望族に属し、文鼎のほか、弟の文鼎と文鼎、子の以燕・孫の敷成・曾孫の鈞と鈞など、高名な暦算学者を輩出している。

梅文鼎は幼時より、父や塾師に侍して“星気を仰観”していたが、本格的に暦算学に志したのは、27歳のとき明の遺民倪正から大統暦の交食法を授けられたことによる。爾来60年、かれは畢生の精力を一芸に傾け、著書80余種を残し、前人の未だ発せざる所を発すという。著書は死後、『暦算全書』 (1723) や『梅氏叢書輯要』 (1759) に纏められている。

梅文鼎が生きた明末清初は (1) 中国の暦算学が衰微の極にあり、(2) 西洋の科学がイエズス会士を介して伝えられた時期にあたる。言い換えれば、中西の両文化が鋭い対立をへて古典主義的な“会通”——中法と西法の独特な融合にいたる時期である。かれは時代精神の庇護のもとに、その自らに与えられた責務を完全になしとげ、後世の暦算学の発展の方向を根底的に規定している。

かれの暦算学研究は大きく二類に分けることができる。すなわち、(1) 中法の研究——中国伝統の暦算理論を再発見し、その精華を叙述顕揚する。(2) 西法の研究——西洋の天文数学を消化吸収し、その難解な内容を解説敷衍している。

主な研究成果をあげれば、まず中法では、郭守敬の授時暦のシステムを復元したことがその代表である。(1) 授時暦は“日躔盈縮・月離遲疾に於て、並びに架積招差を以て立算する”——太陽や月の視運動を高階等差級数によって表示するが、かれはその数学理論を中国の理論伝統に則って明らかにする。(2) 赤道座標と黄道座標の変換にかんする郭守敬の弧矢割円術にたいしては、塹堵——中国伝統の幾何モデルを利用してその成りたつゆえんを説明する。(3) 授時暦の日食月食法についても、

股和較術——中国式幾何理論をもって解説する。

第二の西法研究はやや遅く、1675年43歳のとき『崇禎曆書』の残本等を経てから本格的に開始された、と伝記はのべているが、『崇禎曆書』の天文学説を研究し、“或いはその誤を正し、或いはその欠を補い”，着実な作業を通してチコ・ブラエの体系の全貌を究明しており、かかる基礎研究ないし啓蒙の側面であつたかれの研究は注目に値する。具体的には、(1) 中国に未知の球面三角法の理論と公式をのべ、(2) 周転円・離心円をもって天体の運動を説き、(3) 両方の星表に系統的に整理をくわえ、(4) 中式とは異なった天文儀器・計算尺の制度を論じ、(5) 西方の日月五星の位置計算法を整理紹介している。

梅文鼎の研究は忘却の彼方にあつた中法に再び光をあて、雑然と伝えられた西法知識を整理し、その作業を通して清代暦算学の発展の着実な基礎を定めており、それゆえ中国暦算学の中興の祖と称されるのも宜なくもない。“徵君 (梅文鼎) より以来、数学に通ずる者、後先輩出し、師々相伝う。要はみな梅氏にもとづく”(『疇人伝』)。

梅文鼎の学的影響は暦算学に止まらず、広く清代の学術全般にまで及んでいる。というのも、かれは中西会通——徐光啓以来の理想の最初の真の意味における体现者であつたと同時に、西学中源説 (西洋科学の中国起源を説く) ——会通の基礎理論を完成させた科学思想家ないし社会思想家であつたからである。かれは異文化にたいする中国の排外主義を、民族主義ないし尚古主義的な西学中源説を唱えることによって解消し、その視点をもって中西会通、すなわち中法と西法の兼修を積極的に追求奨励する。かれはいう、“法の采るべきあれば、何ぞ東西を論ぜん。理のまさに明らかにすべきあれば、何ぞ新旧を分かたん”と。かれの尚古主義的な科学研究は清学の華、乾嘉期の古典主義的な人文学にも量り知れない影響を与えている。

梅文鼎の学術は『暦算全書』を介して江戸期日本にかなりの影響を及ぼしたといわれている。享保11年 (1726)、将軍吉宗は同書の翻訳を建部賢弘に命じ、賢弘は中根元圭にこれを託した。同13年、元圭は訳業を完成し、18年、賢弘は序文を附して吉宗に奏呈した。同抄本46冊は現在、宮内庁書陵部に所蔵されている。『暦算全書』の翻訳は、西洋天文学を知る一助として企図されたと建部序にのべているが、西学にたいする寛永禁書令の緩和を意味し、後の蘭学受容の学術上の下地を作つたという意味でその影響は深刻である。(川原秀城)

平成元年11月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市国立天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12	啓文堂 松本印刷
定価 464 円	発行所	〒181 東京都三鷹市国立天文台内	社団法人 日本天文学会
(本体 450 円)	電話	(0422) 31-1359	振替口座 東京 6-13595